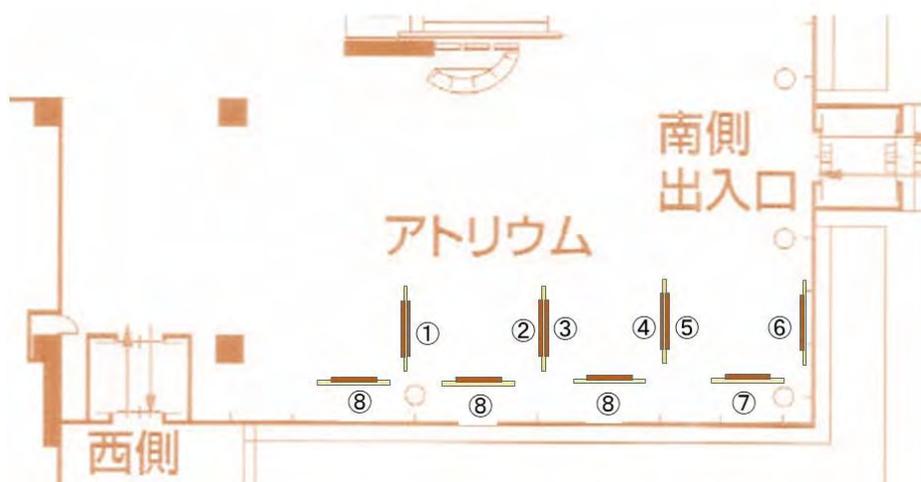


ポスター発表



- ① 渡辺 友美(東海大学)
 - 人々が河川を捉える視点-「巡回企画展 キョクホクの大河」参加型展示の試行より-
- ② 山本 大輔(豊田市矢作川研究所)・深見隆之助(豊田市森林課)
弘中陽介(豊田市環境政策課)
 - 豊田市における流域学習プログラムの実践
- ③ 跡地 紗季(6年生)・山内 将翔(6年生)(三重大学教育学部附属小学校)
 - 学校の池は掃除すべきかー第6学年理科「生物と環境」より
- ④ 坂本 貴啓(金沢大学人間社会研究域地域創造学系)
 - 白山手取川ジオパークの地理的特徴と水教育拠点としての果たす役割
- ⑤ 鈴木 享子(東京学芸大学 環境教育研究センター)
 - 河川整備の違いに着目した都市河川における環境学習フィールドワーク
- ⑥ 金沢 緑(日本河川教育学会)
 - 東海地方における河川教育の普及活動
- ⑦ 佐々木 清(輝く猪苗代湖をつくる県民会議)
 - 青少年を対象にした猪苗代湖における水環境保全学習
- ⑧ 国土交通省東北地方整備局 福島河川国道事務所
 - 福島河川国道事務所における流域治水の広報

人々が河川を捉える視点

－「巡回企画展 キョクホクの大河」参加型展示の試行より－

People's perspectives on rivers

-From a trial of the participatory exhibit "Traveling Exhibition: The Great River of the Far North"-

渡辺友美

東海大学

WATANABE Yumi

Tokai University

国内河川を対象とした学習だけでは日本の河川の特性に気付くことは難しい。本研究では巡回企画展「キョクホクの大河」を改良し、来館者が身近な川を考えることに繋げるための参加型展示を開発・試行した。来館者が作成した「押し川」カードから川を捉える視点の収集と分析を試みた結果、多数の参加が得られ、その内容は川の自然科学的側面から文化的側面まで多岐に渡った。展示の追加により、河川教育教材としての企画展の狙いをより明確にできた。

1. 目的

河川に関する学習は、義務教育・インフォーマル教育ともに日本の川を中心に構成されている。特に義務教育では、川を扱う教科が地理や歴史、地学等に分断されるため、各知識を融合して川を捉える視点が形成しにくい。日本の急峻で短い河川は、河川生態や河川工学分野において世界の中では特殊な位置づけにあり、人々の川の利用もその特性を反映している。国内河川を対象とした学習だけでは、日本の河川の特徴や河川文化の面白さに気付くことは難しい。

本研究の目的は、河川を取り巻く科学的及び文化的事象を分野横断的に扱うこと、そして日本の河川を海外の河川と比較し類似点や相違点を可視化することにより、川を多面的に捉える新たな河川教育の視点を提示することである。この目的のもと、2023年度には日本各地を巡回可能な展示教材を開発し、実践と評価を行った（渡辺・大石，2023）。その評価結果をもとに、2024年度には来館者が身近な川を考えることに繋げるための参加型展示を開発・試行し、人々が川を捉える視点の収集と分析を試みた。

2. 参加型展示の概要

参加型展示は、「巡回企画展 キョクホクの大河」のうち、最後のふりかえりにあたる「川の見方、いろいろ！」に、新規に付け加える形で開発した。本編となる「巡回企画展 キョクホクの大河」の展示構成及び内容は渡辺・大石(2023)

の報告を参照されたい。質問紙調査からは展示本編で提示した川をみる5つの視点、即ち「景観」、「川と人」、「構造物」、「いきもの」、「物理」が概ね妥当であることが確認されたため、この5つの視点を切り口に、来館者が身近な河川をカードに書き込み、日本地図上に掲示して紹介する参加型展示を考案した。作成した6種類の「押し川」カード（景観、川と人、構造物、いきもの、物理、その他）と、掲示用のパネル（日本版）を図1、図2に示す。

景観	川と人	構造物	いきもの	物理	その他
都道府県 川	都道府県 川	都道府県 川	都道府県 川	都道府県 川	都道府県 川
押し川理由	押し川理由	押し川理由	押し川理由	押し川理由	押し川理由

図1 6種類の「押し川」カード



図2 参加型展示 掲示用パネル（日本版）

3. 参加型展示の実践

参加型展示は、令和6年2月12日に埼玉県立川の博物館（埼玉県大里郡寄居町小園39）で実施した展示ガイドイベントの一部として実施し、会期終了まで設置した。企画展全体の会期は2024年1月13日から2月25日で、「巡回企画展 キョクホクの大河」としては神戸、石川に続き3カ所目となった。川の博物館では日本地図上で参加型展示を実施したが、海外の川に関する書き込みも見られたため、4カ所目となった国立極地研究所 南極・北極科学館（東京都立川市緑町10-3）では、企画展会期 2024年7月17日から8月31日を通じて日本版と世界版を並列して掲示することを試みた。書き込み用のカードも日本版と世界版の2種類を作成した。新規展示の制作や運営は、いずれも各会場担当者の協力により実現した。

4. 「押し川」カードの分析

2会場での実践のうち、ここでは埼玉県立川の博物館で記入された「押し川」カード37枚について分析する。「ここに着目！」カテゴリのうち、最も多く選ばれたのは「川と人」12枚で、続いて「いきもの」11枚、「景観」8枚、「その他」3枚、「物理」2枚、「構造物」1枚であった。理由の記述を見ると、川と人では子どものころの思い出ほか、川への想いが強く感じられる記

述が多数あった。いきものの記述では、釣りなど現在進行形で川との関わりがあることが伺える記述が目立った。景観については、当該河川についての詳細な知識が伺える記述が多かった。どのカードも、参加者自身が捉えた川の姿がよく伝わるものとなっていた。

日本版に加え世界版を掲示した国立極地研究所 南極・北極科学館では、会期中に掲示用の日本地図を張り替えたり、カードの一部を剥がして掲示スペースを確保したりする必要が出るほど多くの参加があった。新たな試行となった世界版においても、80枚以上ものカードが掲示される結果となった。

5. 考察

本研究では、来館者が身近な川を考えることに繋げるための参加型展示を開発・試行し、人々が川を捉える視点の収集と分析を試みた。2会場での試行の結果、多くの来館者がこの展示に参加し、参加者自身が捉えた「押し川」を紹介した。その内容は川の自然科学的側面から文化的側面まで多岐にわたるものであった。巡回企画展「キョクホクの大河」は、河川を取り巻く科学的及び文化的事象を分野横断的に扱うこと、そして日本の河川を海外の河川と比較し類似点や相違点を可視化することにより、川を多面的に捉える新たな河川教育の視点を提示することを目的に開発したが、今回の参加型展示の追加により、本展の狙いをより明確にすることができた。

謝辞

参加型展示の試行とデータ収集に快くご協力頂きました埼玉県立川の博物館、国立研究開発法人極地研究所 南極・北極科学館の皆様、また展示にご参加下さった大勢の来館者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は公益財団法人河川財団の河川基金助成事業により実施しました。

参考文献

渡辺友美, 大石侑香. 「巡回企画展 キョクホクの大河」の開発と実践—河川を捉える視点の提示—. 日本河川教育学会第3回三重大会, 三重, 2023年10月

豊田市における流域学習プログラムの実践

Practice of watershed learning for elementary school in Toyota city.

山本 大輔¹, 深見 隆之助², 弘中 陽介³
豊田市矢作川研究所¹, 豊田市森林課², 豊田市環境政策課³
YAMAMOTO Daisuke¹, FUKAMI Ryunosuke², HIRONAKA Yousuke³
Toyota Yahagi River Institute¹, Forestry Division, Toyota City Hall²
Environmental Policy Division, Toyota City Hall³

概要：豊田市内の小学校5年生ほか延べ16校約700人の児童に、社会科の教科書掲載事例を豊田市の事例に置き換えて説明する流域学習プログラムを実施した。プログラムは座学をメインとして、一部はフィールド学習も行った。実施後の教員アンケートの結果、実物を見ることや身近な題材を用いることでプログラムの内容にはある程度の評価が得られた一方で、置き換えた内容だけでは成績評価のテストに対応できない等という意見があった。

I. はじめに

豊田市では、都市と山村が共存する持続的な社会構築のために、あらゆる場面で自然環境に尊重、配慮できる人づくりを目的として、流域学習プログラム事業を実施している。この事業では、環境学習の講座等では前提として語られないような、自然の根幹部分を学んでもらうために、自然環境や教育に関わる市役所の関係課が部局横断の連携により取り組んでいる。

学習の主な内容は、国土について学ぶ社会科の単元の内容を用いて、児童にとって身近な地域における森林や河川の利用及び保全の事例と、自然環境の基本的なまとまりである流域（図1）の視点を伝えるものである。

今回は、令和3～4年度のプログラム試行を経て、令和5年度に実践した内容を報告する。

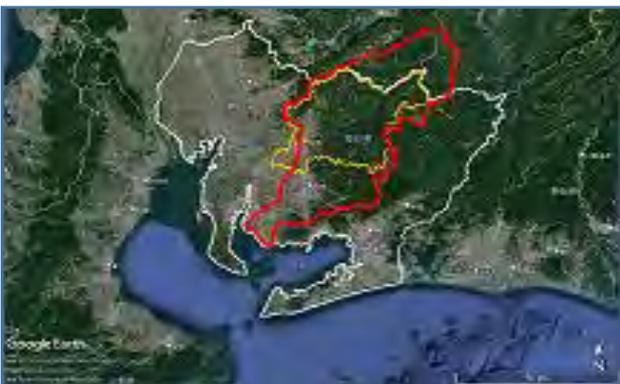


図1 行政区域と流域を示した資料。

II. 流域学習プログラムの実践

令和5年度のプログラムは、市役所から市内小学校全75校に照会し、申込のあった12校及び別に依頼した2校、合わせて延べ16校約700人の児童、約40人の教員が参加した。

プログラムの構成は、森林と河川の座学（各45分）をメインとして、学校の希望によりフィールド学習や出前授業を実施した。フィールド学習を行う学校には、送迎用バスを配車し、座学及び森林のフィールド学習（図2）を豊田市自然観察の森で行い、河川のフィールド学習（図3）を一級河川籠川河川敷で行った。出前授業は各小学校教室での座学のみを行った。

学習資料は、小学校第5学年社会科の単元「わたしたちの生活と森林」「環境を守るわたしたち」の教科書に掲載された事例を、豊田市や矢作川流域での出来事に置き換えた上で、流域の視点を付与した内容とし、プレゼンテーションソフトを用いて作成、説明した。講師は、森林の学習を豊田市森林課職員数名が輪番で、河川の学習を豊田市矢作川研究所職員1名が担当した。学習の際は、講師が一方的に説明するのではなく、ワークシートを使用したり、児童へ問いかけたりすることを意識して行った。

プログラム実施後には、申込によりプログラムを実施した担任及び引率の教員（12校26人）にアンケートを依頼し、全員から回答を得た。



図2 森林内の土の状態を調べる児童。



図3 川の人工物をスケッチする児童。

Ⅲ. プログラムの単元への対応

このプログラムを、著者らが想定した「社会科の単元として活用した」のは8校であった。

単元として活用した学校のうち、このプログラムの内容がどれくらい単元に対応していたかの問いには、「十分対応している」が17人、「一部対応している」が5人、「対応していない」が0人だった。「一部対応している」の回答者からは、もう少し詳しく教えてもらえると教科書に掲載された他地域の事例との対比がしやすいという意見や、児童の成績評価を考慮した場合、教科書の事例を学ばなければ、単元のテストに対応できないので注意が必要であるという指摘があった。

また、「社会科の単元以外で活用した」のは4校であり、いずれも総合的な学習の時間として扱い、小学校で既に進めている学習内容（身近な自然を考える、校区の森林を学ぶ等）を深めるためにこのプログラムを活用していた。

これらのことから、多忙な学校教育の現場に対して、著者らは単元に対応したプログラムであれば活用されやすいと考えていたが、内容の置き換えだけではなくテストへの対応を考慮する必要があることが分かった。その一方で、単元ではなくても総合的な学習で自然環境を扱う学校にも活用されることが分かった。

Ⅳ. プログラム実施の評価と意見

プログラム実施の評価としては、23人が「ねらい通りの学習ができた」とし、「今後も活用したい」と回答したのは24人に上ったため、ある程度の評価が得られたと判断した。フィールド学習も行った学校では、森や川の実物を見たり感じたりで

きたことが子どもたちの理解を深めることに役立つという意見が多かった。座学のみを実施した学校でも、身近な題材で単元を捉えることができたという意見があった。

プログラム実施への意見として、情報が多く、話を聞いている時間が長いため、子どもたちが話し合う時間をとって欲しかったという意見が多く聞かれた。フィールド学習に対しては、その場で質問できると良かった、森を歩くときは10人程度の小グループでいけると安全の面で安心できるといった意見があった。

Ⅴ. 今後の取り組み

プログラムの実践の結果、教員からはある程度の評価が得られ、プログラム継続への期待も感じられた。その一方で、実施上の課題等も聞かれたため、引き続き草の根的に実施校を増やす中で、教員の意見を聞きながら、学校教育の現場で利用しやすい教材の開発や研修等を検討していく必要があると考えている。豊かな自然を利用して発展してきた豊田市で育つ子どもたちに知ってほしい内容として、プログラムの継続実施による市民の環境意識の質の向上を目指していきたい。

Ⅵ. 参考文献

山本大輔・深見隆之助・弘中陽介(2023), 豊田市における流域学習プログラムの試行, 日本河川教育学会第3回三重大会予稿集.

学校の池は掃除すべきか

—第6学年理科「生物と環境」より—

Should Our School's Pond Be Cleaned Lessons from 6th Grade Science on "Living things and the environment"

跡地 紗季、山内 将翔
三重大学教育学部附属小学校
ATOJI Saki, YAMAUCHI Masato
Elementary School Attached to Faculty of Education, Mie University

概要：本研究は、第6学年理科「生物と環境」の単元で、システム思考を用いた授業を実施し、探究学習を展開した。亀池の掃除をテーマに、生態系や持続可能性の相互作用を考慮し、多角的視点で問題を捉える力を養った。授業を通して、自分の意見を他者と比較しながら深め、システム思考の重要性を実感することができた。自由研究でもこの学びを応用し、現実の複雑な問題に対する理解が深まった。

1. はじめに

本研究では、第6学年理科「生物と環境」の単元で、システム思考で複雑系を捉える授業を実施し、探究学習を展開した。

2. 授業について

実践日：令和6年6月~7月

対象：三重大学教育学部附属小学校
第6学年 32名

教科：理科「生物と環境」(8時間)、
総合的な学習の時間「附属小学校の亀池」(全10時間)

3. 児童が単元で学んだこと

3-1 跡地の学び

最初は、田んぼの生き物の生態系の学習から始まりました。それから亀池について掃除するかしないかを考えて、私はした方がいいと思っていました。しかし、他の人の意見を聞いて、掃除するかしないかで迷った結果、掃除したほうがいいという意見になりました。その意見を作るにはシステム思考がとても必要でした。

この学習では、いろんな方向から1つの事を考えることを学びました。これまでは自分の意見が一つの方向からしか考えられなかったかもしれないけど、この学習を通して、いろんな方向から1つの事を見れたらなと思いました。

これからは、後でこうなるのかなとか、その後はどうするかをちゃんと考えて自分の意見

を作るといいと思いました。

3-2 山内の学び

システム思考で考えることの大切さを感じられました。亀池も、調べてみると、たくさんの微生物(命)があることがわかりました。亀池を掃除するか置いて、問題が複雑に絡み合っていることに気がつき、システム思考をすることができました。初めは、生態系を懸念したため、掃除すべきではないと書きましたが、システム思考で考えてみると、そうでもないことがわかりました。しかし、世の中メリットだけしかないということはありませんでした。例えば、生態系を守ろうとして、掃除をせず、悪臭を放つのがその例です。だからと言って無闇に掃除をすると、生態系が崩壊していくのも事実です。とても迷うことが多い授業でした。アンケートを見て、先生でもシステム思考ができていない人もいました。社会に出た時、システム思考を用いると、正しいであろう判断ができる他、説得力も増し、皆が納得して決議ができるのではないかと思います。これからもこのことを忘れずに、システム思考を頭に入れておきたいと思いました。

4. おわりに

本単元で学んだことを踏まえ、自由研究でも研究対象をシステム思考で捉えることにチャレンジをした。システム思考で捉えることは、複雑な世の中を捉えるために役立つ可能性がある。

河川整備の違いに着目した都市河川における環境学習フィールドワーク

Environmental learning fieldwork focusing on differences in urban river improvements

鈴木享子¹, 吉富友恭¹, 和田真治², 野元秀美²
東京学芸大学¹, 東京都建設局²

SUZUKI Kyoko¹, YOSHITOMI Tomoyasu¹, WADA Shinji², NOMOTO Hidemi²
Tokyo Gakugei University¹, Tokyo Metropolitan Government²

概要：大学生を対象として、野川（東京都）の河川整備の違いに着目した環境学習フィールドワークを実施した。河川管理境界に位置する鞍尾根橋の上流（国分寺市：コンクリート護岸）と下流（小金井市：多自然川護岸）において河川及びその周辺を観察し、治水や環境等の観点から両区間を比較した。また、河川整備の状況や背景、経緯を学び、野川の現状や課題、今後の野川について議論した。

1. はじめに

現在、日本の川づくりは、治水・利水・環境保全を調和させた「多自然川づくり」を基本に行われている。これらの河川整備では、住民との合意形成が不可欠であり、整備後の維持管理を含めた住民参加の取り組みが求められている。

「水循環基本計画」（内閣官房水循環政策本部事務局 2024）では、水循環教育の推進・普及が重要な課題の一つとされており、次世代への健全な水循環の継承を目指し、身近に水に触れ学ぶ機会の創出や水循環への意識の醸成が明記されている。特に、視覚的に捉えにくい河川の特性や水循環、生息生物との関係性を理解するためには、現場において事物や事象を直接観察・体験することが重要であり（吉富 2019）、対象とするフィールドの選定やテーマの設定もポイントとなる。

本実践では、地域特有の水の流れや水循環への理解を促すことを目的とし、東京都野川の河川管理境界の上・下流をフィールドに選定し、大学と東京都の連携のもと、河川整備の違いに着目した環境学習フィールドワークを実施した。

2. 方法

(1) 調査地

東京都野川は、国分寺市の日立製作所中央研究所にある大池を水源とし、小金井市・三鷹市・調布市・狛江市を経て、二子玉川付近で多摩川に合

流する一級河川である（東京都建設局 2017）。野川流域内の降水の一部は、国分寺崖線から湧水として流出し、野川の主要な水源となっている。

(2) フィールドワーク

大学生 6 名を対象に、東京都建設局の専門家を講師に迎え、河川整備をテーマとしたフィールドワークを実施した。河川管理境界に位置する鞍尾根橋の上流側（国分寺市：コンクリート護岸）と下流側（小金井市：多自然川護岸）を比較し（図 1）、治水や環境等の観点から観察した。

(3) 議論と振り返り

フィールドワークで観察したこと・気づいたことを発表するとともに、専門家から整備の背景や現状などについて講義を受けた。その後、今後の野川の望ましい姿についてグループディスカッションを行うとともに、後日、今回のフィールドワークを振り返る機会を設けた。



図 1 (A) 上流区間（コンクリート護岸）と (B) 下流区間（多自然護岸）の河道

3. 河川環境・整備状況

上流区間は、コンクリート護岸の河道であるが、河道を移動させずに本来の河川を活かした形で整備が行われている。河川のすぐ隣に住宅が建ち並んでいる状況だが、川へのアクセスは困難であり親水性は低い。河道は狭いものの、道路の下には下水管を配しており、一部の雨水を多摩川まで流す構造となっている。一方、下流区間は、治水対策のため、本来の河道を改修して直線化工事を行い、多自然川づくりによる河川整備が行われている。動植物が多くみられ、河道内には勾配調整用の落差工や付属の魚道も整備されている。また、遊歩道が整備され、高い親水性を有している。水質は両区間ともに良好であるが、下流区間では河川周辺にゴミが目立っていた。

野川はすでに都市計画決定がなされ、上流区間では住民から多自然川づくりによる早期整備の要望が出ている。河道の拡張整備には周辺住民の立ち退きや用地買収が必要であり、住民への説明や合意形成は不可欠である。

4. 学生の反応

学生からは「自然の川」と思っていた下流区間が、実は直線化工事を行い人工的に改修したことを初めて知り驚いた、「表面的に見ているだけではわからない“見えていない部分”があることを知り、新しい川の捉え方を知った」といった感想があがった。学生は、治水対策により河道の位置を変えて直線化し、自然豊かな川を創出したという経緯を初めて知り、外見の印象と整備の実態の差に驚くとともに、人間の生活と自然環境の保全の両方を実現することの難しさを実感していた。

また、整備の現状や問題点、今後の野川について考える中では、「誰のための、何のための整備なのか、立場や視点によって様々であることを知ることができた」、「整備をする際にはメリットとデメリットをよく考え、様々な角度から検討する重要性に気づいた」といった感想があがった。特に、合意形成に関心を抱く学生が多く、「川の近くに住んでいる住民は立ち退かなくてはならないため、切実な問題であると感じた。川からの距離、住んでいる場所でも意見が違うので、すり合わせが大変だと感じた」、「合意形成を含めた行政側のプロセスや考え方を知ることができて良かった」

などの感想が聞かれた。河川を観察しながら歩き、専門家から河川整備の実態や現状について学ぶことで、様々な角度や立場から考える“新たな視点”が得られたことが窺えた。

5. まとめ

河川整備の違いに着目した環境学習フィールドワークは、不可視な部分を含め河川の多角的な見方を促すとともに、河川の現状や今後について、水源の特徴や住民とのかかわり等、地域の観点から考えるきっかけを与えていることが示された。

また、専門家の解説によって、学生は河川整備のこれまでの経緯を理解し、治水や環境に関する取り組みの実態を新たに捉え直していることも確かめられた。

今回フィールドに選定した場所は、河川管理境界で整備状況が明瞭に異なるという大きな特徴を持ち、河川環境・河川整備・水循環・防災・合意形成など様々なテーマの教育実践が可能な場所である。地域が有する特性や課題に着目できる場所をフィールドとして設定し、専門家と連携してフィールドを直接観察・体験することは、効果的な環境学習、河川教育の実現に寄与するものと考えられる。

6. 参考文献

- 内閣官房水循環政策本部事務局 (2024), 「水循環基本計画 (令和6年8月)」
- 東京都建設局 (2017), 「多摩川水系 野川流域河川整備計画」
- 吉富友恭 (2019), 「小さな自然再生と河川の特性の現場体験ー環境学習の観点からー」, グリーン・エージ, 46巻8号, pp. 17-20.

東海地方を中心とした河川教育普及

Dissemination of river education mainly in the Tokai region Sub Title (Times New Roman)

河川教育学会

Japan Society for River Education

日本河川教育学会はアウトリーチ活動を2021年に開始した。2023年度には三重県津市を中心とする東海地方で行うことにした。本報告では、東海地方でのアウトリーチ活動の成果と課題を報告する。

1. はじめに

河川教育は、あらゆる教科と内容の関連がある。授業を通じて子どもたちが河川に関心を持ち、水の恵みや美しさを享受しつつ、今後起こりうる自然災害等の問題解決に向け主体的かつ適切に判断し行動できる能力を育むものである。

アウトリーチ活動は、2023年度は、三重県を中心とした東海地方の小・中・高等学校の児童・生徒、保護者、地域住民を対象に、教育の専門家が所属する地域の人材と連携して、授業や河川活動、講演などを行い、河川教育を普及することを目的として行なった。

2. アウトリーチ内容

アウトリーチ活動は以下の通り行なった。

- (1) 5月中旬: 川のデジタルマップ研修 (ICT)
- (2) 6月上旬: プロジェクトWE T講習会 (東海地方の教員、地域住民対象)
- (3) 7月上旬: 雲出川流域調査 (教材開発)
- (4) 8月下旬: 河川教育講演会・開発した実験器具等展示
- (5) 10月上旬: 河川教育実践研究会

三重大学教育学部附属小学校を会場に河川教育研究会を行なった。ドローンやVRを用いた雲津川3Dモデルを活用した授業とともに、河川防災に関連した授業を公開した

(6) 4月～9月: 現地調査・研修会・講習会

共同研究者の所属する教育系大学教員が学生、河川教育実践校及び教育委員会、地域住民に広く河川教育の意義を伝え、北海道から九州まで広く教育実践を公開した

3. 成果と課題

アウトリーチ活動による出前授業、講座等により、「よい子は川に行きません」といった古い河川観から、川は豊かな教育の場であることが

認知されてきている。また、流域防災の必要性を実感した多くの教員が流域防災を取り入れた防災教育の取り組みも始まった。このようにアウトリーチ活動が古い河川観から新しい河川観への変容の機会をつくる機会となっている。

各地で行ったアウトリーチ活動参加者の合計は1,668名である。河川教育実践研究会に参加した近隣県の教員からは「河川教育を本校でもやってみたい」という声が聞かれた。アウトリーチ活動を各地で開催することにより、河川教育の裾野が広がっている。教員や学習者は、川に親しみを持ち、豊かな情操を自ら育み、体系的な知を得て今後の河川防災の担い手となると確信した。

さらに、河川教育を行うことで、データ活用能力が育成されていることがわかった。河川・水害で、適切に避難行動を取らず被災してしまう住民が多数いる。この現状から、教育現場でICTを用い、様々なデータを検索し、これから起こりうる災害の種類と自宅付近の危険箇所を知り、そこを回避して避難所までたどり着く安全な経路の探索を行う。このことで日常生活場所と自分の身の安全確保を自分事として捉えるようになってきた。

しかし、各地域で河川の特徴が異なるため、東海モデルが全ての地域に適用できるわけではない。本アウトリーチにより、新たな教材教具が生み出され、新たな河川教育が展開された。これらの成果を広めるとともに、各地域に応じた河川教育を作り上げることで今後の河川教育の広がりが期待できる。そのためにも地域の応じたアウトリーチ活動も視野に入れるとともに、学会として河川教育の価値を見出し、さらに河川教育を広めていきたい。